■ 子どもとともに未来をつくるコンダクター ■

特別支援教育コースへようこそ！

学校教育課程 特別支援教育コース

特別支援教育コースでは，知的障害児をはじめとする発達障害児に関する理解を深め，地域・社会における共生の理念のもと，障害児教育の理論や実践について教育研究をおこない，人間発達への深い理解をめざします。

特別支援教育コースはどんなところ？

【先輩によるコース紹介】土田奈穂（新発田高校卒：新潟県）

特別支援教育コースでは，障害の基礎的な知識はもちろん，発達検査，障害児やその家族，周囲の子ども達への支援など，実際の教育現場で生かせる勉強ができます。特別支援教育が行われている今，このような知識はどんな場所でも求められます。また特別支援教育コースでは，学校行事のサポートや，余暇を一緒に過ごすボランティア活動も数多く行われています。障害のある方と一体となれた時は，本当に楽しく，自分自身の成長にもつながります。

さらに私たちの選修では，研究室での行事・企画が盛り沢山で，同学年だけでなく，先輩とも仲良くなれます。このような充実した環境の中で，様々な人と出会い，視野を広げ，自分の可能性をより高められるのが，特別支援教育コースの魅力です。

どんな免許が取得できるの？

特別支援学校教諭免許はもちろんのこと，幼稚園，小学校，中学校，高等学校教諭の免許が取得可能です。

授業にはどんなものがあるの？

特別支援教育コースでは，知的障害や病弱，肢体不自由を中心に様々な障害について学びます。主な専門科目は以下の通りです。

障害児教育学総論
発達障害病理概論
知的障害教育論
知的障害児の心理学
病弱教育総論
病弱児の心理・生理・病理
肢体不自由教育総論
肢体不自由児の心理・生理・病理
視覚障害教育総論
聴覚障害教育総論
言語障害教育総論
重複障害教育総論
LD・ADHD 等教育総論
特別支援学校教育課程論
特別支援教育研究演習
知的障害児心理学実験
知的障害児生理学実験
障害者福祉論
特別支援学校教育実習

ボランティアが盛んな特別支援教育コース

【先輩からひとこと】　鈴木　陽（横手高校卒：秋田県）

特別支援教育コースでは，ボランティア活動がとても盛んです。一人ではなかなか参加できない人でも仲間と一緒なら安心ですね。特別支援教育コースでは，先輩を含め多くの仲間と一緒に様々なボランティア活動が体験できます。たとえば，障害のある子どもの運動会やスキー教室，登山，宿泊学習などのサポート。また，私たちと同年齢の青年と一緒にスポーツや音楽などで余暇を楽しむ活動もあります。どの活動も一人ひとりの生き生きした笑顔があふれています。サポートしている私自身が，一番元気をもらっているような気がします。入学した頃は障害についてなにも知らないことばかりの私でしたが，たくさんの活動をとおして様々なことを体験的に学んできました。かけがえのない仲間と出会い，そして一緒に成長できるのが，私たちのコースのいいところです。

■■■ 研究室のスタッフは，次の５人です！

■■■ 今野和夫
■■■ 大城英名
■■■ 内海　淳
■■■ 武田　篤
■■■ 藤井慶博

次ページからスタッフの紹介が始まります
よろしければ，スタッフからのメッセージをご覧下さい。

今野和夫　（ こんの　かずお ）

■■■ 担当している主な授業

共生教育論Ⅰ（障害者の理解と支援）　知的障害児心理学実験
知的障害児の心理学　病弱児の心理・生理・病理　特別支援教育研究演習

■■■ 私からのメッセージ

秋田大学に赴任して、はや 30 年が過ぎようとしています。この間、両親の看病や介護のための仙台通い（500 回くらいは往復していると思います）や、長期に及ぶ腰痛など、公私ともに大変なことがたくさんありました。でも一方では、私が障害のある子どもをもつ親御さん達と 1985 年に発足させ、これまで 25 年にわたり進化？し続けている「秋田すずめの会」のおかげで、障害がある本人達の可能性の大きさや奥深さを幾度も強く実感することができました。また本人のみならず、そのきょうだいやお父さんお母さん達との絆も強まり、私や私の家族までもがたくさん支えられてきました。25 年間に渡る学生間での先輩から後輩へのボランティアのバトンタッチも見事なものでした。地域や施設に出向いて歌や踊りの練習の成果を発表したり、夏の宿泊交流会や成人を祝う会、クリスマス会といった季節ごとのイベントを楽しんだり、会報や文集を作ったりと、すずめの会の活動は盛り沢山ですが、本人達のみならずその家族や学生達、そしてもちろん私自身にとっても、会の活動はそれぞれの生活の中に自然にとけ込んでいます。家以外のもう一つの大切な「居場所」になっているとも言えるでしょう。これからも「みんなで、なかよく、いつまでも」です。

私はどの担当授業においても、上述のすずめの会やそれ以外の地域的活動（親の会や NPO など）に対する参画や支援の実践を通して私自身が得た経験や知識と、私がなかよくなることのできた本人や親、支援者などの人的資源を、可能な限り生かそうとしています。それは、受講生が将来どんな仕事についても、あるいはどんな道を選んでも、いつかきっと役に立つと思うからです。たとえば「共生教育論Ⅰ」では、ダウン症の青年達を講師として招いて、普段の仕事

の様子や夢を語ってもらったり、得意な手話ソングを学生に紹介してもらったりしています。これが縁で、青年と学生の間に普段の生活の中でもなかよく声をかけ合う関係が生まれています。また「病弱児の心理・生理・病理」の授業では、心臓病など重い病気の子を持つお母さん達から、家庭、病院、学校などでの経験や様々な思い（例えば、心臓病は外からはわかりにくいゆえに、先生や友達からも誤解や偏見を持たれがちなこと）を話してもらっています。

単なる同情や哀れみをこえて、障害のある人（子どもを含めて）のしあわせの「ために」自分はこれからどのようなことができるのか。しなければならないのか。「共に生きられる社会」が実現するためには、どういうことが求められるのか。自分は何ができるのか。

これらの問いについて、明快な答えを得ることはけっして容易ではないと思います。一方、まずは「ために」を脇において「ともに」という気持ちで障害のある人達やその関係者（親など）と学生時代に存分に関わること、なかよくなることで、それらの問いへのたしかな答えを探り当てることができると信じています。

■■■ 著書紹介

「すずめの文集（障害児とともに生きる母親の手記）**」**
今野和夫・秋田すずめの会/編（学苑社）

「（障害をもつ子どもの幸せを願う）**ふれあいボランティア」**
今野和夫・秋田すずめの会/編（学苑社）

「知的障害者の言語とコミュニケーション」（上・下）
M.ベヴェリッジ他編　今野和夫・清水貞夫/監訳（学苑社）

「知的障害者の人格発達」（共訳）
E.ジグラー他編　田中道治/編訳（田研出版）

「必携・特別支援教育コーディネーター」（共著）
相澤雅文・清水貞夫・三浦光哉/編著（かもがわ出版）

大城英名（ おおしろ　えいめい ）

■■■ 担当している主な授業

特別支援学校教育課程論　　知的障害教育論Ⅰ　　視覚障害教育総論
重複障害教育総論　　特別支援教育研究演習

■■■ 学生のみなさんへのメッセージ

南国沖縄で生まれ育ちました。北国秋田は秋と冬の季節が好きです。「なんくるなるさ（どうにかなるよ）」「てーげーでいいさ（大概でいいよ）」が私の口癖です。おおらかなのかいいかげんなのか、まあ、そのような人間です。

好きな食べ物は、「ゴーヤーチャンプル」「フーチャンプル」「ソーメンチャンプ」、つまりチャンプル系統が好きです。すこしからいお水も好きです。たいていはニコニコしています。家庭菜園を楽しみとしています。カラオケでは氷川きよしやモンゴル 800 の歌をよく唄います。

雪の降る頃になると、故郷が恋しくなります。そのため、身を刺す冷たい風が吹きすさんでも、今日もあの寒風の丘の頂上に立ち、遙か南国のあたたかい風が吹いて来るのを背中に感じようとします。思えば遠くへ来たもんだ、とときどき考えます。

思へば遠く来たもんだ
今では女房子供持ち
此の先まだまだ何時までか
生きてゆくのであらうけど

さりとて生きてゆく限り
結局我ン張る僕の性質
と思へばなんだか我ながら
いたはしいようなものですよ

今日もわたしは中原中也（『頑是ない歌』）のように生きながらえております。学生のみなさん、特別支援教育のことも含めてですが、一緒にいろいろ人生のことを学んでいきませんか。特別支援教育コースはいつでも、みなさんに門を開いています。

■■■ 附属特別支援学校へもどうぞ

秋田大学教育文化学部には附属特別支援学校があります。現在、附属特別支援学校の校長を兼任しておりますが、みなさんには是非気軽に本校を尋ねてほしいと思います。いろいろな行事のボランティアもお願いしたいと思います。

本校は知的障害のある児童生徒のための特別支援学校ですが、小学部から高等部まで児童生徒 61 名、教職員 35 名の小規模の学校です。学校では「生活の生活による生活のための教育」が主に行われています。遊びや体験による生活学習あるいは作業学習などを通して、子どもたちが社会生活へ参加するための力を培う教育を行っています。国語や算数などの時間もありますが、これも生活に結び付くように授業が行われています。

本校の教育目標は、「児童生徒のもっている可能性を追求し、一人一人の能力特性等に応じた知識・技能・態度を身に付けるとともに、可能な限り積極的に社会生活に参加できる人間を育成する」、ということです。また、めざす子ども像は、「じょうぶな子ども、明るい子ども、がんばる子ども」、です。これは子どもたちが、身体的にも、精神的にも、社会的にも、健康な人であってほしい、またそのような人を育むということを教育の目標にしています。

子どもたちは学校での勉学だけでなく、地域の祭りなどの活動にも積極的に参加します。とくに秋田市の「竿燈（かんとう）まつり」へは、連続 25 回の参加をしております。子どもたちは肌を焦がす北国の灼熱の陽射しにもめげず、太鼓を叩き、竿燈を差し、地域の人々と結び合う、故郷の「竿燈まつり」を楽しみにしています。子どもたちにとっては大切な社会参加の機会です。

学生のみなさんには、運動会、宿泊学習・校外学習、わかはと祭（学校祭）など、多くの学校行事にボランティアをお願いしています。どうか御協力を宜しくお願い致します。

内海　淳（ うつみ　じゅん ）

■■■ 担当している主な授業

障害と共生（福祉と人権）　障害児教育学総論　障害者福祉論
知的障害教育論Ⅱ　特別支援教育研究演習

■■■ 授業紹介

「知的障害教育論Ⅱ」: 職業教育・進路指導・キャリア教育

あなたは、自分の進路をどのように考えていますか？
どんな仕事に興味がありますか？
あなたの働く意味は？

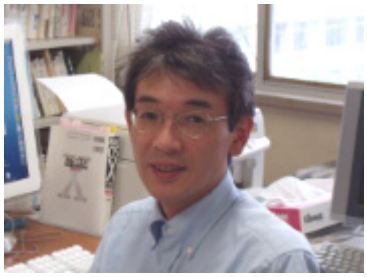
この授業では、知的障害のある生徒たちの職業教育・進路指導・キャリア教育のあり方を学びます。みなさんが自分の働く意味や進路を考える契機にもなることを願っています。

障害児教育では、伝統的に職業教育が、実習的活動が重視されてきました。それは、自立、特に職業的な自立が教育の成果として期待されてきたからです。ですから、特別支援学校では、「社会への移行」のために職業教育が重視されます。しかし、私は青年期の「大人への移行」も大事にした支援を考えていきたいと思います。２つの移行課題から実践を考えることが、青年期の職業教育や進路指導を充実させ、進路選択と社会参加の主体としての生徒たちを豊かに育ててくれると考えています。

また、特別支援教育でもキャリア教育の推進が問われ、障害のある子ども・若者の勤労観・職業観を育てることが課題とされています。教育の対象は子ども・若者なのですが、本質的に問われているのは大人・教師の労働観だろうと思います。教師はそのような自覚のもとでキャリア教育の実践を構想していくことが求められます。

未来の教師である学生の皆さんが雇用のあり方を問い、自らの労働観を豊かに育ててくれることを願っています。

武田　篤　（たけだ　あつし）



■■■ 担当している主な授業

共生教育論　　発達障害病理概論　　聴覚障害教育総論
言語障害教育総論　　知的障害児生理学実験　　特別支援教育研究演習

■■■ 学生のみなさんへのメッセージ

「愛だけでは障害児は救えない。」

これは学生時代の恩師の言葉です。なぜかこの言葉は、今も私の脳裏から離れません。学生時代、私は恩師のもとで視覚の基礎メカニズムを解明するために、くる日もくる日もタキストスコープ（視覚刺激を瞬時に呈示する装置）をのぞき込み、誘発電位（脳波）をとる実験に参加していました。そんなある日ふと私の中で、「こんなことをしていて、本当に障害のある子どもたちの支援に役立つのだろうか？」という疑問がよぎりました。意を決して恩師に疑問をぶつけると、冒頭の言葉が返ってきたのでした。

その後私は、臨床や実践に密着した教室に移り、臨床の現場で働くことになりました。しかし、働きはじめてすぐに熱意や努力だけではだけではどうしようもない現実に直面しました。同時にそのとき初めて基礎研究の重要性というものを知りました。私は基礎研究に戻ることはありませんでしたが、この言葉を支えに、臨床活動を行い、少しでも知見を積み重ねるという道を今まで歩んできました。「愛だけでは障害児は救えない。」という言葉はこれからも私の中から消えることはないでしょう。

蛇足ですが、この言葉の前には当然ながら「愛がなければ障害児は救えない。でも、」という意味が込められていることはもちろんです。学生の皆さんに、このメッセージを伝え、共に学び合う授業をめざしています。

■■■ 授業紹介

「共生教育論」　〜自己との対話を求めて〜

みなさんは対話の相手を誰に求めていますか？クラスメート，友人，ネットでのチャット仲間，親，教師,... ところで，対話の相手に自分を選んだことがありますか？もちろん，ないはずはありません．人は日々自己との対話をして生きています．しかし，自分の生き方や人生について，深く，真剣に自分と向かい合ったことがありますか？と問われると，答えに窮してしまうかもしれません．

この講義は，障害者，なかでも障害者の支援をテーマにしています．多くの学生のみなさんは，「ノーマライゼーション」とか「バリアフリー」，「共生」ということばを耳にしたことはあっても，これまでの人生のなかで障害のある人は身近になく，障害者とは自分とはどこか違う遠いところに存在していると思っていたかもしれません．私たちは，過去の様々な経験のなかから得た自分なりの考え方や価値基準に従って，他者を理解しています．しかし，そこでは一般に差異が排除され，類似性や共通性のみが受けとめられやすい傾向があります．私たちの障害者の理解にも，ともすればそういった理解のしかたが作用しています．それを打破するために，この講義では常にみなさん自身に「自己との対話」を求めます．そして，講義を通してみなさんは障害者の支援を行うには，結局は自分自身の生き方の意味を自分なりに探し求めることがまず必要だということに気づくかもしれません．それによって，自分とは異なる他者や差異を尊重することができ，相互理解が生まれ，新しい関係や社会が生まれていくことが期待されます．

この講義は，みなさん自身に問いかけます．

人の幸せとはなんだろう？　あなたにとっての幸せとは？
生きるとはどんな意味をもつの？　あなた自身の人生の意味とは？
愛とは？　親子の愛とは？　人類愛とは？　あなたの愛する人は？
人と人との絆とは？　あなたと最も絆が強い人は？　等々....

私たちが普段漠然としか考えないことについて，立ち止まって考えてみてほしいと思います．きっと，新しい自分が発見できるかもしれません．単に障害者の支援だけでなく，自分のこれからの人生を考えてみたい人も是非，この講義に参加してみてはいかがですか．きっとあなたなりの生きることの意味を見つけることができるかもしれません．（この講義は「基礎教育科目」ですので，教育文化学部の学生であれば，どなたでも受講できます。）

藤井慶博（ふじい　よしひろ）

■■■　担当している主な授業

共生教育論　　障害児教育・福祉制度実習　　ＬＤ・ＡＤＨＤ等教育総論
特別支援教育研究演習

■■■　みなさんへのメッセージ

－障害者は支援される存在なのか？－

　私は以前、特別支援学校の教員をしていました。ある時、Ａ高等学校から交流の申し出があり、「どんな生徒がくるのだろうか」と交流初日を心待ちにしていました。
　ところが・・・
玄関先にきた生徒達は、腰パン、茶髪（若干ですが）、ルーズソックス（時代を感じますな～）の出で立ち。各教室に 2～3 人ずつ配属された生徒は、棒立ち状態、両手を後ろに組み、仲間とペチャクチャ・・・
「何じゃ。この生徒たち」と、私は正直頭を抱えました。
　ところが、交流の回数を重ねるたびにこの生徒達に明らかな「化学変化」が表れました。服装が変わりました。髪の色が変わりました。何よりも子ども達への接し方が変わりました。交流最後の日、バスに乗って帰る時には全員が涙、涙・・・。
　この話は、これで終わりではありません。
　後日、この高校生のみなさんが、自分たちでお金を出し合い、バスを借り上げて、特別支援学校の子ども達に会いにきたのです。
　この時、私は二つのことに感激しました。
一つは、高校生達の変容です。初めの腰パン、茶髪、後ろ手だった彼ら彼女らが、交流の最後には全員が涙を流し、自腹を切って特別支援学校に会いに来るまでになったことを。

また、それ以上に感激したのは、彼ら彼女らに涙を流させる、そして「もう一度、この子達に会いたい」と、心を鷲づかみにした特別支援学校の子ども達の存在です。いったいこの子達のどこに、高校生に「化学変化」を起こさせる力があるのでしょうか？

一般に、障害のある人は「支援される存在」であり、障害のない人は「支援する存在」と考えられがちです。果たして、そのように単純な構図なのでしょうか？

－共生社会とは？－

紹介した交流のエピソードからは、特別支援学校の子ども達以上に、高校生にとって大きな学びがもたらされたことを感ぜずにはおれません。

数年後、この時の交流がきっかけとなって、特別支援学校の教員になった、または福祉の道に進んだ高校生がたくさん出たという話を聞く機会がありました。つまり、障害のある子どもたちが、健常者（と言われる人）の人生行路の道標ともなった事実がそこにあったのです。

グローバルな時代です。障害のあるなしにかかわらず、人と人とが向き合うとき、互いの価値を認め合い、多様であることを尊重し合い、共に生きていける社会を形成するために、自分の役割は何なのか、みなさんと一緒に学んでいきたいと思っています。